

## 「2025年本屋大賞」が発表されました！

「1年間で出版される書籍は何冊にのぼるか?」。総務省統計局の発表によると、2020年から2023年までの4年間で、平均して約67,300点の新刊書籍が、毎年出版されているようです。これに電子書籍の刊行点数を加えると、新刊書籍の出版点数はさらに多くなることでしょう。巷にこれだけたくさんの書籍が出回っているのであれば、「いったい、どの本を読めばよいのか」と悩んでしまうことも、たびたびではないでしょうか。そんな時、書籍選びの基準の一つとして、「芥川賞」や「直木賞」といった受賞作品を読むという方法も「あり」だと思います。その筋の厳しい審査を経て、栄えある賞を授与された作品なので、読み応えが十分と予想できます。書籍を対象とした「〇〇賞」を探してみても、いかがでしょうか。「これを読んでみたい」と思える書籍に出会える可能性が高まることでしょう。

### 今月の「企画展示」テーマの一つは、「本屋大賞」受賞作品の紹介です。

「本屋大賞」は、全国の書店員が直近1年間で出版された書籍(小説)の中から、「最も売りたい」と評価したものに授与されます。今年で22回目となる「本屋大賞」が、つい先日発表されました。ノミネートされた10作品の中から「大賞」に輝いたのは、**阿部暁子『カフネ』(講談社)**です。「どんな本を読もうかな」と、今考えている人がいれば、この作品を手にとってみたら、どうでしょうか。『カフネ』以外のノミネート作品も紹介しておきます。こちらにも参考にしてください。



2位	早見和真『アルプス席の母』(小学館)		
3位	野崎まど『小説』(講談社)		
4位	山口未桜『禁忌の子』(東京創元社)		
5位	青山美智子『人魚が逃げた』(PHP 研究所)	8位	朝井リョウ『生殖記』(小学館)
6位	恩田陸『spring』(筑摩書房)	9位	金子玲介『死んだ山田と教室』(講談社)
7位	一穂ミチ『恋とか愛とかやさしさなら』(小学館)	10位	宮島未奈『成瀬は信じた道をいく』(新潮社)

ちなみに、興味関心が著しく偏っていますが、私が毎年チェックしている賞は、ノンフィクション作品を対象としたものです。「大宅壮一ノンフィクション賞」、「講談社本田靖春ノンフィクション賞」、「新潮ドキュメント賞」などがあります。筆者の取材力や分析力などに圧倒される作品が非常に多く、こちらも読書におすすです！



現在、五月人形を図書館1階で飾っています。例年、ひな人形を展示していますが、五月人形の飾り付けは初めてのことです。ぜひご覧ください♪

# 「新書大賞」を受賞した作品も紹介します！

4月の「企画展示」に関するもう一つのテーマが、「新書大賞」受賞作の紹介です。中央公論新社が主催する「新書大賞」は、直近1年間に出版された新書の中から、それらに詳しい100名によって選ばれた「最高の1冊」に授与されます。新書とは、もともと、新書判(173mm×108mm)の本を指します。しかし、主だった出版社による新書の創刊・発刊の言葉を読んでもみると、人がよりよく生きるために、社会がよりよくなるために必須の「教養」を提供することが、新書の共通した目的のようです。各分野の有識者が読者に必要と判断した知識や考え方をまとめた「ガイドブック」。そんなところでしょうか。

さて、今年の2月に発表された「新書大賞2025」を受賞したのは、**三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(集英社新書)**です。明治時代から令和の現代まで、労働の歴史と読書の歴史とをリンクさせながら、読書の「衰退」を描いています。その背景にあるのが、日本人の「成功観」の変化です。明治時代から戦後の高度経済成長期くらいまでは、立身出世という「成功」に向けて、「教養や勉強といった社会に関する知識」が求められ、読書はそのための重要な手段でした。しかし、平成以降の現代における「成功」とは、自分の行動を変革する、すなわち、自己啓発を成し遂げることを意味するようになり、そのためには、自分に必要な情報を集め、不必要な情報を「ノイズ」として排除しなければならなくなりました。ゆえに、「不必要な情報も入ってくる読書は、働いていると遠ざけられることになった」と、筆者は言います。

本書の評価すべき点は、労働史と読書史を平成・令和の現代にまで射程を伸ばしたことで、現代以前と現代における労働と読書の構造的な断絶を見出したことです。筆者が断絶の要因として指摘するのが、いわゆる「新自由主義」が人々に強要している「能力主義」の徹底化。つまり、「自分はもっとできる、もっとがんばれる」と、自らを追いこむことで、結果として、「働きながら本が読めなくなるくらい、全身全霊で働きたくなってしまおう」ように人々を仕向けているのが、現代社会の特徴だと指摘します。筆者は「疲労社会」や「トータル・ワーク」といった概念を援用しながら、「全身労働社会」こそが読書の「衰退」を招いていると主張します。

本書の見解はとても明解ですが、他方で、論理の展開がやや図式的に見受けられます。それは、目次を見ると、よく分かります。読書の歴史が、「明治時代」、「大正時代」、「昭和戦前・戦中」、「1950・60年代」、「1970年代」、「1980年代」、「1990年代」、「2000年代」、「2010年代」と「きれいに」切り分けられているからです。人間や社会に関わる歴史が、通常、これほど単純に区分されることはありません。逆に言えば、筆者はなぜ、読書の歴史を「きれいに」時期区分できたのかということ、各章で核となる参考文献の要旨をつなげているからです。言ってしまうと、参考文献の「いいとこ取り」なのです。本書と同じく、日本近現代史における教養や読書をテーマとした文献、例えば、**大澤絢子『「修養」の日本近代—自分磨きの150年をたどる』(NHKブックス、2022年)**、**竹内洋『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』(中公新書、2003年)**、**福岡良明『「勤労青年」の教養文化史』(岩波新書、2020年)**などと読み比べてみてください。皆さんは、本書に対してどのような感想を持つでしょうか。

とはいえ、労働と読書の歴史について、明治時代から現代までを俯瞰した書物は、ほとんどありません。本書はそれらの歴史の大枠をつかむという点で、重要な成果を残しています。一読をお勧めします。なお、下記のウェブサイトでは、「新書大賞2025」にノミネートされた他の作品も掲載されています。こちらをご覧ください。

\* 「新書大賞2025」サイトはこちら⇒ [https://chuokoron.jp/shinsho\\_award/](https://chuokoron.jp/shinsho_award/)

